

浜降祭



浜降祭は、毎年7月の海の日^{（7月17日）}の早朝、茅ヶ崎・南湖の浜において斎行されます。寒川神社をはじめ、寒川町と茅ヶ崎市の各社の神輿約40基が夜明けとともに南湖の浜に参集するその勇壮ぶりから「暁の祭典」と呼ばれています。

①歴史から見る浜降祭 「浜降祭とは」

湘南地方随一といわれる壮大な夏の祭典である浜降祭は、毎年7月の海の日^{（7月17日）}の早朝、茅ヶ崎市・南湖の浜（西浜海岸）において斎行されます。寒川神社をはじめ、寒川町・茅ヶ崎市の各神社の神輿約40基が夜明けとともに南湖の浜に参集し、その勇壮ぶりから「暁の祭典」と呼ばれています。



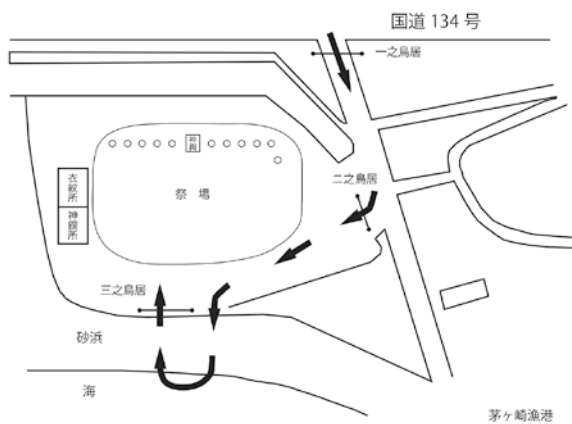
【暁の祭典 浜降祭】

これほどの数の神輿が一堂に会する祭典は全国的に珍しく、昭和53年に「神奈川県無形民俗文化財」に指定され、「かながわのまつり50選」にも選ばれるなど神奈川県を代表する祭典であるといえます。

また、祭典日と梅雨明けの時期が重なることから、浜降祭は「湘南地方に本格的な夏の到来を告げる祭典」といわれ、地元の人々に愛され続けています。

古来より「ハマオリ」とは海辺における「禊^{（みそぎ）}」を意味しており、「海水」の持つ霊力により心身を清め、神霊の更新を図り御神威を授かる神事であると考えられます。このような例は全国各地に見受けられ、古くから伝承されている習俗といえます。

浜降祭において「身滌^{（みそぎ）}（禊）」が重要な意味を持っていることは祭場での神輿の渡御経路からも窺えます。



【浜の渡御経路図】

南湖の浜に参集する神輿は、一之鳥居、二之鳥居をくぐると一旦、海へと進路を変え、禊^{（みそぎ）}を行った後、三之鳥居をくぐり駐輿します。これは浜祭典に先立ち、海水によって心身を清めて御神威を授かることを意味しています。

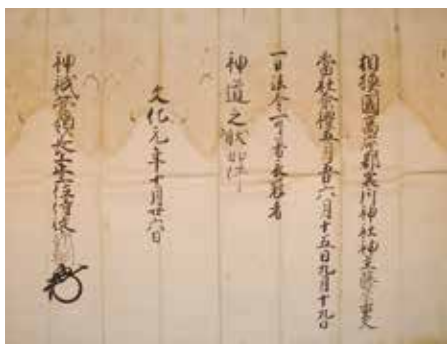
県内では、平塚市に鎮座している平塚八幡宮の例祭に行われる浜降神事をはじめ、海岸地域に鎮座する多くの神社で同様の神事を確認することが

できます。しかし、それらは当該神社による単独の神事形態であり、寒川神社の浜降祭のように近隣市町の神社の神輿が一堂に参集する神事は極めて珍しいといえます。

②歴史から見る浜降祭 「浜降祭の変遷」

浜降祭の起源については、明確な年代は明らかにはなっていませんが、安永9年（1780）「当社年中祭附并神領石高帳」に「六月十五日、浜にて御供と御神酒」という記載が確認できることから、江戸時代中期には浜において神事が行われていたと推測できます。

また文化元年（1804）に当神社の神主家であった金子伊予守に宛てられた「神道裁許状」には「当社祭禮、五月五日、六月十五日、九月十九日」の記載より國府祭・浜降祭・例祭であることは明白であり、國府祭と浜降祭は例祭と並ぶ重要な祭典であったことが窺い知れます。



【神道裁許状】

このように浜降祭はすでに江戸期には確立されていたと考えられます。近年は毎年7月の海の日に固定されましたが、時代の変遷とともに祭日の変更が度々行われていたようです。

江戸期には旧暦の6月15日に斎行されていた浜降祭ですが、明治6年に新暦へ移行されると、浜降祭も旧暦の6月15日から新暦の6月30日に変更され大祓神事と同日になりました。

明治期に入ると浜降祭に関する資料も増え、その様相がより明確になっていきます。当神社所蔵『寒川社経費』は当時の祭典規模を知り得る重要な資料であるとともに「浜降祭」という語句の初見資料です。同資料によると浜降祭の神輿渡御に伴う人員は、神主1人に乗馬1匹、そして馬の口取りを含む従者が6人に加え、社人が10人、乗馬10匹、口取り10人、荷持1人という構成であったことが分かります。当時も浜降祭は國府祭と並ぶ「二大祭礼」であってその神輿行列は一之宮の名に相応しい勇壮なものであったことを資料が物語っています。

明治7年の社務日誌によると、当時すでに当神社の他に八幡神社（寒川町一之宮）、鶴嶺八幡社（茅ヶ崎市浜之郷）、子聖神社（藤沢市瀬郷）、渋谷神社（海老名市門沢橋）の合計5社にて浜降祭を斎行していたことが分かっています。

ここで注目すべきことは鶴嶺八幡社の存在です。鶴嶺八幡社は6月29日を

水無月大祓と定めて、独自に禊神事を行っていたという伝承があります。しかし明治6年に寒川神社の撰社となったことで寒川神社と鶴嶺八幡社と共同で浜降祭を行うようになったといわれています。



【現在の浜祭典（宮司祝詞奏上）】

明治9年には農作業の繁忙期にあたることから、祭典日はそれまでの6月30日から7月15日に変更されました。明治10年になると鶴嶺八幡社の撰社が解除され、翌11年には旧儀の通り、両社単独で浜降祭を斎行する形式となりましたが、大正12年に再び鶴嶺八幡社は浜降祭に参加するようになり、現在は神輿の渡御に際し、鶴嶺八幡社が当神社の「先駆神社」（先導役）を務めることが慣例になったと考えられます。

近年においては、平成9年より海の日（7月20日）に、平成16年より7月第3月曜日となり今に至っています。

③歴史から見る浜降祭 「浜降祭の中断」

明治32年「赤痢蔓延の兆候あり」として県知事より浜降祭の中止命令が下されました。しかし「渡御いたしたき衆望にこれあり」と浜降祭の斎行を強く切望し、関係各所との調整の結果条件付きながら祭典斎行の許可を得ることができました。

その年は当神社のほか遠藤（藤沢市）・下寺尾（茅ヶ崎市）・門沢橋（海老名市）・甘沼（茅ヶ崎市）・一之宮（寒川町）・下大曲（寒川町）の6ヶ村が祭典に参加したとあります。



【令和3年 浜降祭奉告祭】

以後、明治34年は不景気により中止、大正2年には明治天皇が崩御されたことよって諒闇（喪に服すること）と

なり中止されました。近年においては令和2年、3年、4年と新型コロナウイルス感染症の影響のために中止を余儀なくされています。

④ 浜祭典 「御旅所神主」

寒川神社をはじめ各神社の神輿が参集する形態を有していた浜降祭ですが、現在の祭場である茅ヶ崎市・南湖の浜で始まった理由については諸説あります。

その1つが御祭神降臨伝承説です。南湖の浜には八大龍王の碑文が祀られており、この場所が寒川大明神の降臨地であるとの記載がありますが史料的な確証はなく伝承の域を越しません。

もう1つは天保年間に起こった歴史的事実に基づく説です。天保9年(1838)5月5日、國府祭に参加した寒川神社の神輿がその帰路において馬入の渡し場(現平塚市)で地元氏子の争いに巻き込まれ、大雨により増水した相模川に転落し、相模湾まで流失してしまいました。この時に狼藉をはたらいた16人には打首の刑が科されましたが、代官・江川太郎左衛門の温情により、丁髷を切落とすことで事済みとされました。その丁髷は馬入の蓮光寺に葬られ、現在「丁髷塚」としてその姿を残しています。

一方で神輿流失という未曾有の状況に際して、湘南海岸一帯の村々に300石の報償金を付けて神輿の捜索を依頼しました。江戸時代、当神社が徳川幕府

から与えられた社領は100石であったことを鑑みると、神輿の捜索をいかに重要な事項として捉えていたかが分かります。



【丁髷塚】

捜索を依頼してから数日後、南湖の浜で地引網を曳いていた網元・鈴木孫七は、海中に沈んだ神輿を発見しました。孫七は神輿を自宅の裏山に安置して寒川神社へ急報し、無事に神輿は戻ったといわれています。この功績により孫七は寒川神社より社地を賜わり、磯場も孫七の漁場である南湖の浜へ移され、同地に神輿が渡御するのが慣例となりました。鈴木家は御旅所神主に任命されました。以後、鈴木家は代々「鈴木孫七」と名乗り御旅所神主を務めるようになり、現在で10代目になります。



【御旅所神主 鈴木孫七氏】

⑤ 浜祭典

「ホンダワラとハマゴウ」

現在でも鈴木家は浜降祭で重要な役割を担っており、その1つが駐輿場所の準備です。

浜降祭の前日、神輿が着御する場所に盛り砂をし、「ホンダワラ」と「ハマゴウ」が敷かれます。そして四隅に斎竹が立てられ注連縄が張られます。「ホンダワラ」は海藻の一種で、「神馬藻」という漢字が当てられ、古くから特別な海藻として捉えられていたと推測できます。一方、「ハマゴウ」は、本州から沖縄にかけての砂地に生育する海浜植物です。天保年間に神輿を引き上げた際、付近に自生していたハマゴウを採りその上に神輿を安置し、寒

川神社に急報したことに因み、現在でも神輿の褥(下に敷くもの)として敷かれているものと思われれます。以前は茅ヶ崎の海岸一帯でも自生していたハマゴウも、次第にその数が少なくなり、現在では鈴木家の庭で育てられているハマゴウが使用されています。



【ホンダワラとハマゴウ】

天保年間に流出した神輿は、天保15年(1844)に岡田村の菅谷神社に金子15両・神酒1駄で譲渡されました。このような由緒をもつ菅谷神社の神輿は、浜降祭で特別な地位を与えられ、現在でも南湖の浜での席次は当神社に次ぐ座を確保しており、常に東隣の席次に位置しています。

⑥ 浜祭典

「一之宮行在所」

浜降祭の帰路、神輿は寒川町一之宮の行在所に立ち寄ります。この場所には石碑が残されており、かつて神輿が当所に休憩の際、清浄な場所ので栽培された麦藁に火をつけて神輿に投げつけていたという事実が記載されています。



【寒川神社駐輿記】

この意義については「かつて鈴木孫七が寒川神社の神輿を発見し届ける際、濡れた神輿をこの地で火を焚いて乾かしたという説」、「浜での祭典を終えて神社に還幸する神輿への迎え火という説」、「浜での海水による清めと、火による清めの意味を持つという説」などの諸説があります。

現在、一之宮の行在所においてこのような儀式は行われていませんが神輿が浜へ渡御の道中、一之宮にて近隣住民によって送り火が焚かれています。



【送り火】

暗闇をゆく神輿の安全を祈念するように燃える火の情景は今も神輿を照らしています。

現在は当神社をはじめとする各社の神輿が南湖の浜に参集し、祭典が斎行されますが、明治期の資料には現在とは少し違う渡御の様子が記載されています。

午前2時に祭典祭が斎行され、南湖の浜へ向かう道中、元撰社である鶴嶺八幡社の大門前にて郡内村社の神輿に迎えられます。その後、一列に並び南湖の浜へと渡御していました。

鶴嶺八幡社の参道から祭場へと向かう麗らかな神輿の姿は人々の注目の的になっていたようです。



【浜降祭古写真】

⑦ 浜祭典

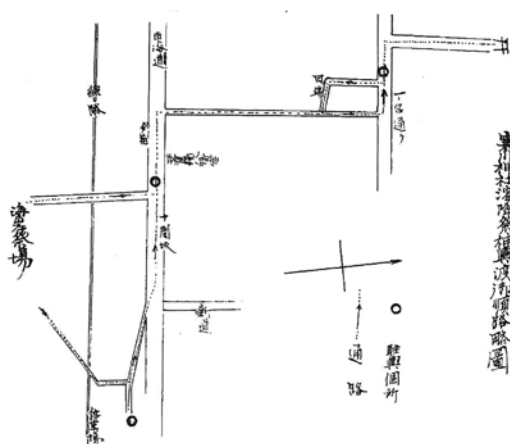
「渡御経路」

現在の神輿は田端まで担いで渡御してそこから車両で浜祭場へと向かいますが、かつては全行程を担いでいました。

今から約100年前にあたる大正7年の記録によると午前3時に祭典した神輿は、一之宮の土橋（現南部公民館周辺）にて菅谷神社の出迎えを受けた後、

田端から今宿を経て鳥井戸橋に到着、茅ヶ崎各社の神輿と合流し、祭場へ向かっていました。資料には鳥井戸橋に「午前3時半」到着と記載されています。実際の距離を考えると、30分程で到着することはほぼ不可能であると思われるのですが、当時の担ぎ手の健脚ぶりを窺い知ることが出来る興味深い資料です。

参加していました。大正7年の参加神社は、寒川神社、菅谷神社（寒川町岡田）をはじめ、柳島八幡宮（柳島）、神明大神宮（円蔵）、八王子神社（本村）、日枝神社（中島）、八雲神社（南湖上町）、第六天神社（十間坂）、住吉神社（南湖下町）、神明社（下赤羽根）、八雲神社（南湖中町）、八幡宮（甘沼）の合計12社でした。当神社と菅谷神社の祭場における列席位置は固定されており、この2社を中心に各社が決められていたようです。



【大正期の渡御経路図】

⑧ 浜祭典

「神輿出御数」

現在、浜降祭には寒川町・茅ヶ崎市内の34社の神輿が出御し、子供神輿まで含めるとその数は39基です。

大正期においては、11〜14社の神輿が



【34の神社、39の神輿にて浜降祭を斎行】

結びに

本誌は寒川神社の浜降祭に関する基礎知識として社報『相模』505号、509号、513号、517号の記事を再編集して製作致しました。

浜降祭は、参加神社それぞれが古来より大切に行っている祭典です。浜降祭が途切れることなく後世に受け継がれることを衷心より祈念致します。